

書評

がんユニバーシティ

まると人間としての患者と、医者と、私



- 編集 市原 真
- 定価 3960 円 (本体 3600 円 + 税 10%)
- 判型 A5
- 頁数 488
- 発行 医学書院

「がん」という現象の全体像が
浮かび上がる書

市原真先生とは「SNS 医療のカタチ」というグループで長く一緒に活動してきた。医療情報をやさしく伝えるにはどうすればいいか、イベントや SNS で試行錯誤を重ねてきた仲である。だから断言できるが、市原先生は私の知る限り日本で一番よく喋る病理医である。講演会の楽屋でも打ち上げの席でも、彼の話題が尽きるのを見たことがない。正直に白状すると、本書を手にとったとき少しだけ心配になった。あれだけ喋る男に、聞き役が務まるのだろうか。心配は無用だった。本書の市原先生は、相手の言葉を面白がり、掘り下げ、話し手本人も自覚していなかった本音まで引き出していく。2年半かけて17名の「がんを見つめる人」に話を聞いてまとめ上げた本書は、いわば市原真の「聞く力」の集大成である。

『がんユニバーシティ』という書名のとおりに、本書は大学の講義形式をとる。学長特別講義は生命科学者の仲野徹先生。以降、消化管内科医、外科医、腫瘍内科医といった臨床の最前線から、創薬研究者、放射線診断医、病理医、緩和ケア医、精神腫瘍科医まで、講師陣は実に多彩だ。さらにマギーズ東京の訪問看護師、両側乳がんを経験したテレビ局ディレクター、医療記事を書き続けてきた新聞記者と、医療者以外の視点も並ぶ。

全17講、488ページの大著だが、身構える必要はない。突然の告白になるが、私は30年以上のB'zファンだ。実

感として、良い講義は良いライブに似ている。始まってしまえばあっという間で、終わったあとには、もう一度最初から聴きたくなる。そうやってB'zのライブをリピートし、沼にどっぷりハマった。この本も同じ沼の構造をしている。

なぜ、もう一度読みたくなるのか。理由ははっきりしている。読むたびに、自分の「窓」の狭さに気付かされるからだ。私は皮膚科医としてメラノーマをはじめとする皮膚がんの診療に携わってきた。がん診療は専門分化の極みにある。気が付けば、自分の臓器、自分の職種という窓からしか、がんを見られなくなっていた。同じ「がん」を見つめているはずなのに、内科医と外科医で、医者と患者で、見えている景色はこんなにも違う。その違いを、市原先生は裁くことなく、面白がりながら丁寧に並べていく。読み進めるうちに17の視点が立体的に組み上がり、「がん」という現象の全体像が浮かび上がってくる。

副題には「まると人間としての患者と、医者と、私」とある。がんになっても、患者は患者である前にまると人間である。医者もまた、専門家である前にまると人間である。そして「私」——読者自身もだ。2人に1人ががんになる時代、本書はがんにかかわる医療者だけでなく、いづれ患者やその家族になるかもしれない全ての人のための教養課程である。入学に試験はいらない。ページを開けば、そこが教室だ。

評者

近畿大学医学部皮膚科学教室 主任教授
大塚篤司